

# 研究業績及び実務等の一覧

2010年12月23日現在

印

氏名

著書、学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
<p>①学位論文</p> <p>①-1『近代都市計画の導入に伴う都市空間の形成と変容から見た歴史都市フェスの都市保全』</p>	単著	2005年10月 (平成17年度 甲第2488号)	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程	本研究は、モロッコの歴史都市フェスを事例として、近代都市計画の導入を契機とした都市の多様化と、その保全のあり方を歴史的に考察した博士論文である。歴史研究では旧市街の独自の形成プロセスと、フランス人計画家による都市の三地区構造化の過程が解明される。続くフィールド研究では三地区が相互に重層化していくプロセスが実測やヒアリングから解明される。更に、こうして成立した多様な都市空間が、国際協力を得てどのようにマネージされているのかを検討し、今後の都市保全のあり方を議論する。2006年日本都市計画学会論文奨励賞を受賞した。
<p>②審査付き論文</p> <p>②-1「モロッコ・フェスにおける植民都市と旧市街の複合過程—イスラーム都市と近代計画都市との共存関係に関する考察—」</p>	単著	都市計画論文集、2000年11月、35号、61-66頁	日本都市計画学会	本稿では、モロッコの旧都フェスの近代都市計画史を通史的に把握する。フェスは8世紀に創建された歴史都市である。1912年に仏保護領となると、総督リヨテは都市計画家アンリ・プロストに命じて新旧市街の分離政策を提唱し、旧市街の凍結保全と、新市街の西欧都市化を実現した。独立後は居住形態が多様化し、旧市街の過密化と老朽化が進展する中、ユネスコによる世界遺産登録を経て、世界銀行による保全計画が実行された。これは凍結保存とは対照的な、フェスの多様性に配慮した保全再生型の空間整備であった。
<p>②-2「フェスの土地利用計画の変遷から見た新旧市街の分離主義の転換—「大衆のための都市計画」の修正と定着の過程—」</p>	単著	都市計画論文集、2002年11月、37号、469-474頁	日本都市計画学会	本稿は独立期のフェスに焦点を絞り、保護領時代の新旧市街の分離政策が転換していく過程を明らかにした。1940年代からモロッコの都市計画局長となったミシェル・エコシャールは、都市に流入を続ける離村農民のため、分離政策の転換を試みる。現地人のための旧市街、植民者のための新市街に続く、第三番目の地区としてアイン・カドゥスを構想・実現した。独立後もこの転換は継承され、ユネスコの策定支援による都市基本計画においては、三地区の連携と統合による多様性の継承が土地利用の目標に据えられている。
<p>②-3「フェスの新市街におけるモスクの創建過程と空間的特質について」</p>	単著	都市計画論文集、2003年11月、38号、925-930頁	日本都市計画学会	本稿は、フェスの新市街が独立後、フランス人植民者のための都市空間から、モロッコ人のための都市空間へと変貌していく過程の一端として、新市街におけるモスクの創建過程とその空間的特質に着目し、フィールドワークから明らかにしたものである。新市街のモスクは独立後5件建設されており、土地や資金面を有力者の寄付に頼りながら建設されてきた。迷路状の旧市街とは異なる、新市街の近代都市型街区に適応して空間形成が進展しており、また寄付の仕組みハブスの継承もなされていた。

著書、学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
②-4「モロッコ・フェス旧市街の保全再生政策の展開―「住むための遺産」政策と空間形成―」	単著	Keio SFC Journal、2004年3月、vol.3、No.1、34-67頁	湘南藤沢学会	本稿では、フェスの旧市街政策と実際の空間の変容との関連を明らかにした。旧市街は、主として「公私の分離」に基づき階層的に成り立っている。そこから見ると、保護領時代の凍結保存は文化財登録を中心とする公的空間の保全といえる。一方、都市問題の深刻化を経て独立後に至ると、ユネスコを中心に旧市街を現実に住民が居住する地区として再生していく政策が取られるようになり、「私の空間」への介入が進んだ。これは、歴史的建築物の博物館や集合住宅への改修などによる、「住むための遺産」政策と総括できよう。
②-5「フェスの旧市街における街路線制度を用いた近代型道路の形成過程と空間的特質について」	共著	日本建築学会計画系論文集、2004年9月、583号、105-112頁	日本建築学会	本稿は、フェス旧市街において、街路線計画が適用されて暗渠道路が建設された過程と、その空間的特質を明らかにしたものである。フェス川は汚染が進んでおり、旧市街の過密化対策と合わせて暗渠道路にするという計画が立てられた。そこで街路線が導入されたが、旧市街の複雑な形状に対応して、不規則な道路空間が形成された。いわば新旧市街が重層化した町並みであるが、住宅の店舗化や公園の形成による、表と裏の入れ替わりが進展している。旧市街の保全再生計画の萌芽的事例と位置づけられよう。 担当: (105-112頁) 共著者: 日端康雄
②-6「モロッコ・フェス旧市街の保全再生手法に関する研究―伝統的街路網と自動車道路の整合化の方法―」	共著	住宅総合研究財団研究論文集、2005年3月、No.31、113-124頁	住宅総合研究財団	本研究は、フェス旧市街の階層的な空間構成を考察の柱として、保全再生手法を提案することを目的とした共同研究である。保全再生が必要とされてきた歴史的背景を、過密化・老朽化とこれまでの政策から明らかにした後、近代道路の先駆的計画であったルセーフ道路の空間的特質を概括し、次に歴史的建築物の再生・変容・転用に関するフィールド調査から、空間の再生の指針を得る。これらに基づいて、存続可能な旧市街の将来像を提示し、現代のユネスコ・世界銀行による空間整備案の改善案を提案した。 担当: (113-124頁) 共著者: 深見奈緒子、新井勇治、今村文明、飯塚真弓、山田絵里
②-7「フェス最初の郊外地アイン・カドゥスの空間的特質から見た整備のあり方と歴史的意義」	単著	都市計画論文集、2005年11月、40-2号、51-62頁	日本都市計画学会	本論文は、フェス第三番目の地区となった郊外地、アイン・カドゥスを対象に、CIAM(現代国際建築家会議)モロッコ支部による都市計画の理念と、実現実績、そして独立後の変容の実態を明らかにし、今後の空間整備の指針を得ることを目的とする。離村農民を住まわせるための郊外地構想は、ミシェル・エコシャールによって本格化し、独立後に実現した。均質で施設も不十分であったが、住民自身による寄付と増改築によってモスク建設やCIAM型住宅の上階建設など、住環境の拡充が進展している。
②-8「仏保護領期モロッコにおけるハブスの近代化とハブス事業の展開」	単著	都市計画論文集、2005年11月、40-3号、289-294頁	日本都市計画学会	本稿は、モロッコの都市の歴史的な持続のメカニズム、ハブス(正則アラビア語でワクフ)の近代化の過程を明らかにする。16世紀までに、フェスではモスクやマドラサの維持管理を周辺住民の寄付によってまかなうハブスの仕組みが確立していた。保護領時代に入るとハブスは改革され、郊外地の計画において、施設と店舗を一体的に計画することでこの仕組みを再現する都市設計がなされた。ラブラドやエコシャールらが担当したカサブランカ、フェス、マラケシュなどの郊外地において、施設と店舗が近接するハブスの仕組みが再現された経緯を明らかにした。

著書, 学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所, 発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
②-9「番匠谷堯二の中東・北アフリカ地域における業績について」(提出)	単著	都市計画論文集、2008年11月、43-3号、163-168頁	日本都市計画学会	本稿は中東・北アフリカの多くの都市で都市計画の実績を残した番匠谷堯二の業績を明らかにして、この地域の都市計画史研究の基礎情報を提供する。番匠谷は清家清に学んだ後、パリの CIAM 系アトリエで学び、次いでアルジェにおいて、キリスト教徒とムスリムが共存できる住宅設計に従事した。6、70年代において、エコシャールらと共にベイルート、ダマスカス、アレppoの都市基本計画を策定し、それを日本の国際協力を誘導しながら、都市の保全と近代化を一貫して追及したことが最大の業績である。
②-10「歴史都市アレppoにおけるオスマニザシオンの系譜 フランス都市計画の海外展開の一事例」(提出)	単著	都市計画論文集、2008年11月、44-3号、889-894頁	日本都市計画学会	シリア第二の都市アレppoは、国際的な交易拠点として発展し、多様な文化が共存してきた歴史都市である。本研究では、フランス委任統治領期以来導入されてきた近代都市計画の変遷を明らかにして、スークを中心とする旧市街の開発のあり方を展望する。旧市街の開発計画はルネ・ダンジェの初代都市計画から提案され、独立後にギュトンによって具体化された。番匠谷堯二の計画は旧市街保全を重視するものだったが、アレppoの一部地権者達は計画の実現を望み、結果的に旧市街を貫通する数本の道路開発が実現した。
③著書				
③-1『モロッコの歴史都市 フェスの保全と近代化』(提出)	単著	2008年2月	学芸出版社	本書は、モロッコの歴史都市フェスを事例として、近代都市計画の導入を契機とした都市の多様化と、その保全のあり方を歴史的に考察したものである。歴史研究では旧市街の独自の形成プロセスと、フランス人計画家による都市の三地区構造化の過程が解明される。続くフィールド研究では三地区が相互に重層化していくプロセスが実測やヒアリングから解明される。更に、こうして成立した多様な都市空間が、ユネスコや世界銀行による国際協力を得てどうマネージされているのかを検討し、今後の歴史的環境保全のあり方を展望する。
④その他				
④-1 国際会議				
④-1-1 "The transition of Urbanism in the city of Fez"	単著	9 <sup>th</sup> International Planning History Conference, Aug., 2000, Abstract, p.159, Helsinki	International Planning History Society	The 9 <sup>th</sup> conference of International Planning History Society (IPHS), that is the unique international society of urban planning, was carried out in the university of Helsinki, Finland. Based on my previous research paper(業績②-1), I reported a general history of modern urban planning in Fez. My session was titled "Urban Transition", and we discussed about the historical meaning of French colonial urbanism and the role of UNESCO today.
④-1-2 "Town development of the Islamic city from the view point of growth management"	単著	The 6th Inter-University Seminar on Asian Megacities, Mar., 2001, Taipei	Inter-University Seminar on Asian Megacities	Since 1995, Keio university and some universities in Asian countries have organized "Asian Megacities" as the Inter-University Seminar. As a graduate student at Keio, I had participated this annual conference every year. In this paper, I analyzed Moroccan growth management policy after independence. The population growth in the post-colonial era was so serious that the administration made efforts to make residents leave from the old cities suffering from overpopulation.
④-1-3 "Can we apply the new urbanism to Asian cities? A critical essay on behalf of the study of the Western urban planning"	単著	The 7th Inter-University Seminar on Asian Megacities, Mar., 2002, Manila	Inter-University Seminar on Asian Megacities	In this essay, I examined a possibility of applying the new urbanism policy to Asian cities. From the viewpoints of the coexisting of various cultures and classes, I explored some principles of urban fabric among the historic quarters of Manila, Singapore, Xi-an and Tokyo. As a result, many types of coexisting were found in these cities and we can regard these characters as a possibility of applying the new urbanism.

著書, 学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所, 発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
④-1-4 "Historic mixed use of the city of Fez"	単著	The 8th Inter-University Seminar on Asian Megacities Mar.,2003, Beijing	Inter-University Seminar on Asian Megacities	This paper was mainly based on my previous article(業績④-3-1), that dealt with the old city of Fez from the viewpoint of mixed-use. In the old city, there are many types of traditional buildings corresponding to housing, commerce, industry and religion. In order to avoid the monotony and homogeneity of modern urban planning, it is quite meaningful to refer to the proximity of a mosque and <i>habous</i> shops, and that of ateliers and houses.
④-1-5 "Islamic urbanity in modern planned city -How the universality of Islam appears in modern urban growth?-"	単著	The 1st workshop for PNHCECA, Mar.,2004, Proceedings, pp.70-79, Kunming	Planning and Networking of Historical Cities in Eastern and Central Asia	In this paper, I made clear the history of the construction of new mosques in the new city ( <i>Ville Nouvelle</i> ) of Morocco. The presentation was held in the first conference of PNHCECA in Kunming, China. Some participants were Muslims and various discussions around modern Islamic urbanity were given. On the other hand, participants from Kunming gave a suggestion of comparative study with mosques in China.
④-1-6 "Gyoji Bانشoya in Alger - His achievement as a teamwork in l'Agence du Plan-" (提出)	単著	The 1st Algeria-Japan Academic Conference Nov.,2010, pp.XX-XX, Alger(印刷中)	ARENA(Alliance for Research on North Africa of University of Tsukuba)	This paper introduces an achievement of a Japanese architect Gyoji Bانشoya in Alger. Because micro scale and macro scale was clearly unified in French-Algerian architecture and urban design, Bانشoya started in Alger to work on not only housing design but also urban planning. In fact, he participated to the projects of Les Annassers, Mahieddine, Champ de Manoeuvres, Chateaneuf and Frais-Vallon. Though there were no works done by Bانشoya alone with his credit, the fact that the mayor Chevallier called "Japanese" at the head of foreigners suggests that Bانشoya performed many important missions.
④-1-7 "Urban Conservation based on the International Cooperation -A case study of the Qanawat south area, Damascus-" (提出)	単著	Proceedings of the 8th ISAlA, Nov.9-12, 2010, pp.595-600, Kitakyushu	The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia	Though many historic cities exist in the Middle East and the North Africa, little has been written on the issues about urban conservation in this area. In this discussion paper, I introduce an example of the actual conservation project which has been carried out by JICA in Damascus, capital of Syria. For the target area of the Qanawat south, I and Syrian counterparts examined two methods which will be generally available for historic research on heritage buildings and quarters: analysis of documents and field surveys.
④-1-8 "Field Survey for Urban Conservation -In Search of Architectural Vocabulary of the Qanawat south area, Damascus-"	単著	Regional Development and Water Resource "A New Vision for Sustainable Society", Nov.28-30, 2010, pp.61-64, Tunis	CERTe-ARENA-CANMRE	For the urban conservation project to which the author participated, there are two methods of field survey. The first way of the field survey is at the quarter level and the second way is at the residential level. As the Tunisian urban designer Besim S Hakim suggests, collection of traditional architectural vocabulary and measurement of residential spaces of traditional houses should be carried out. The results of the survey may provide useful guidelines for inhabitants and craftsmen to appreciate the value of traditional houses.
④-2 研究会発表 ④-2-1 「イスラーム都市と現代都市計画」	単独	文部省科学研究費「イスラーム地域研究」5班aグループ第8回「中東の都市空間と建築文化」研究会、2001年5月	東京大学 東洋文化研究所	筆者のテーマは、第一に老朽化・人口増加といった都市問題を多く抱える現代都市としてのイスラーム都市に都市計画を実施すること、第二にイスラームの歴史的都市がなぜ面白いのかを解明し、都市計画の中にその原理を参照し、取りこむことである。現状では、第一の視点を解明するために、モロッコにおけるフランス植民都市計画、及び世界遺産たる旧市街の保全再生計画の検討を行なっている。地域研究における学際的交流は重要なことであり、この発表では都市計画の基礎的な問題意識に沿った平易な発表を心がけた。

著書、学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
④-2-2「モロッコ植民都市のモスク」	単独	中近東の都市空間と建築文化の研究会 2003年6月	東京大学 東洋文化研究所	筆者は2001年から03年まで、モロッコ国アル=アフワイン・イフラン大学大学院に留学していた。帰国直後の本発表では、現地において実施してきた調査結果を報告した。主な調査報告は、モロッコの植民都市、すなわちフランスにより建設された新市街のモスクに関連するもので、質疑応答では活発な討論がなされた。同調査を学術論文(業績②-3)に昇華させていく上での試金石となった。
④-2-3「モロッコ・フェスの新市街ー植民都市から現代モロッコの都市へー」	単独	地中海学会定例研究会、 2004年2月、 地中海学会月報、267号、4頁	上智大学	本報告は、フェスの新市街に建設されたモスクについて、建設の経緯と実現した空間の特質について、主として業績②-3に基づきながら、地中海学会の定例研究会において発表したものである。新旧市街がなぜ分離されたのか、また、プロストにより設計された新市街の広場と道路からなるバロック空間の実態を報告した。次いでどのような経緯でモスクが建設されたのか、また結果として成立した都市空間の特徴とハブスの応用の実態について、報告した。
④-2-4「ヌーベル・メディナ(Nouvelle Medina)ーイスラーム都市」の人為的計画」	単著	日本建築学会 大会学術講演梗概集、F-1分冊、 2005年9月、137頁	近畿大学	本論文では、カサブランカに建設された郊外地、ヌーベル・メディナの実現過程と空間構成の一端を明らかにし、建築学会の大会にて口頭発表したものである。旧市街の魅力に心酔していたアルバール・ラブラドは、フィールド・サーベイから街路や施設のあり方を解明し、自らが郊外地設計を実施する際の指針としてまとめた。2005年現在の調査では、それらの指針が、窓の高さやサーバートの規則性などに概ね確認でき、商店街として賑わっていることも明らかとなった。
④-2-5「国際協力における歴史都市の保全再生の展開ーシリア国ダマスカスを事例としてー」	単著	国際開発学会 春季大会報告論文集、 2010年6月、 157-158(ポスター報告)	北海道大学	ダマスカスは数千年と言われる起源を誇る歴史都市である。歴史都市は、代々の生活の知恵の結晶であり、優れた歴史建築の集積であり、また多様な文化の長きに渡る共存・交流の記録である。しかし、現代においては老朽化や過密化、あるいは経済発展に伴う行過ぎた近代開発に直面しており、いかにして保全再生されるべきかが、国際的に重要な課題となっている。本研究は、20世紀以降ダマスカスにおいて、日本を含む各国の国際協力によって実施されてきた都市計画や保全再生事業の歴史について、概要を報告する。
<b>④-3 総説・解説</b>				
④-3-1「モロッコ・フェス旧市街の公私境界ーゲルニーズ街区の混合利用」住環境の分水嶺(連載第12回)	共著	住宅建築、 2003年2月、 335号、 145-149頁	建築資料研究社	本論文は、フェスの旧市街の空間的成り立ちと持続の仕組みを解明したものである。旧市街は「公私の分離」とよばれる空間構成の原理に基づき形成され、その結果主要通りから袋小路へと至る階層的な街路網が形成された。一方、都市の持続の仕組みとして、周辺住民の寄付によるモスクや学校の持続の仕組みハブスが存在する。ゲルニーズ街区を例に、フィールドワークによってその詳細を明らかにした。 担当: (145-149頁) 共著者: 飯塚真弓・十代田泰子
④-3-2「歴史的稠密市街地における「人間」ー世界遺産都市フェスを事例としてー、アラブ・イスラーム研究(1)「人間の安全保障」における人間(第九章)	共著	危機管理に関する人文・社会科学学際研究、G-SEC Discussion Paper Series 2003-No.4	慶應義塾大学 (文部科学省 学術フロンティア推進事業)	本論文は、アラブ・イスラーム研究「人間の安全保障」における人間」をテーマに実施された共同研究成果を報告したものである。筆者担当部分である第9章においては、主として都市防災の観点から、旧市街の過密化等の問題を議論した。現代の計画では道路を導入することで近代的な防災設備を利用可能にする考えが支配的であるが、旧市街そのものに備わった歴史の知恵による安全保障のあり方も継承していくことが大切と論じた。 担当: (第9章) 共著者: 奥田敦・山本達也・佐野光子・植村さおり

著書、学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
④-3-3「ハブスの持続と変容-富の自律的還流のための都市づくり」	単著	危機管理に関する人文・社会科学学際研究、G-SEC Discussion Paper Series 2004-No.8	慶應義塾大学 (文部科学省 学術フロンティア推進事業)	本論文では、歴史都市フェスを事例に、モロッコの歴史的な都市の持続システムであるハブスの仕組みを概括し、それが現代においていかなる変容を遂げながら存続しているかを明らかにした。フランス保護領時代には都市設計の文脈で施設と商店街の一体化が進められたが、現代では新設のモスクにハブス店舗が直接埋設される形が多く見られる。施設と商店が密接に結びつく、モロッコの都市の持続の仕組みは現代でもなお有効であり、今後の都市作りにおいて留意されるべき特徴の一つである。
④-3-4「戦災復興の都市計画家・番匠谷堯二の足跡と1968年のダマスカス・プラン」	単著	危機管理に関する人文・社会科学学際研究、G-SEC Discussion Paper Series 2005-No.6	慶應義塾大学 (文部科学省 学術フロンティア推進事業)	本論文では、日本出身の都市計画家、番匠谷堯二が、アルジェリアや中東(シリア及びレバノン)といった紛争当事国の中で、どのような業績を残したのかについて、主として関係者の証言から整理したものである。アルジェリア戦争下のアルジェや、第三次中東戦争下のダマスカスにおいては、都市計画は常に戦災復興を念頭において策定されていた。そうした中で番匠谷が、多くの人々との関わりの中で実際に策定した計画を確認した。
④-3-5「アレppoのまちが残った建築家・番匠谷堯二の足跡を追って」	単著	月刊オルタ、2006年8.9月合併号、42-43頁	アジア太平洋資料センター	本報告は、番匠谷堯二の業績について、主としてシリア国アレppoを中心に、広く一般の読者向けに、エッセイ風にまとめて連載したものの第一回である。報告媒体は国際協力分野のNGOが発行する雑誌であるが、広く国際協力の先人の業績を掘り起こす意義を認めて頂き掲載された。アレppoのスクはその規模と歴史で有名であるが、番匠谷計画によって旧市街の一部が切開され、近代的な街区が導入されていることを報告した。
④-3-6「ダマスカスのまっすぐな道 建築家・番匠谷堯二の足跡を追って」	単著	月刊オルタ、2006年10月号、24-25頁	アジア太平洋資料センター	本報告は、前報に続き、番匠谷のシリア国ダマスカスにおける業績を中心に扱った。執筆時に勃発したレバノン紛争(2006年)の影響によって生じたダマスカスの計画停電の様子に触れながらの報告となった。ダマスカスもまた番匠谷による都市計画の影響を大きく受け、たとえば旧約聖書で有名な旧市街の「まっすぐな道」も、自動車が通行可能な道路として計画的に拡張されたものであった。
④-3-7「フェラジ門の時計塔が見たもの 建築家・番匠谷堯二の足跡を追って」	単著	月刊オルタ、2006年11月号、26-27頁	アジア太平洋資料センター	本報告は、前報に続き、番匠谷がフェラジ門地区において構想した計画が、保全運動の広がりの中で中止されざるを得なかった経緯を報告し、連載の最終回とした。執筆時はラマダン(断食月)中であり、ラマダンに忠実な人々と、お祈り時間を無視して近代街区へと足を運ぶシリア人サラリーマンとの対比を描きながら、そこにも番匠谷計画の痕跡が残されていることを報告した。
④-3-8「シリア国際協力の先人 建築家番匠谷堯二1」	単著	アハバール・カシオン、2007年1月、157号、1-2頁	JICA シリア事務所	本稿は、同じく番匠谷堯二の業績を報告する目的で執筆された。報告媒体は、JICA シリア事務所の広報紙アハバール・カシオンである。現代のダマスカスの法定都市計画がなぜ40年もの昔に日本人によって策定されたのか、という疑問から書き起こした不定期連載である。清家清の門弟から出発して、フランス、アルジェリアにおいて歴史的なものや近代的なものを融和させる作風を育んでいく様子を報告した。
④-3-9「シリア国際協力の先人 建築家番匠谷堯二2」	単著	アハバール・カシオン、2007年7月、178号、1-2頁	JICA シリア事務所	本稿は、前報に続き、アルジェリアから帰国した番匠谷が、丹下健三やミシェル・エコシャールとの出会いを機会として、中東への都市計画にいつそうの関心を育んでいく経緯を報告したものである。ダマスカスの「まっすぐな道」は、旧約聖書の時代から変わらず、現在でもモスクと並んで教会が多く存在する。歴史的に重要な場所の都市計画を実施した番匠谷の考え方について報告した。

著書、学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
④-3-10「自著を語る モロッコの歴史都市 フェスの保全と近代化」	単著	地中海学会月報、2008年12月、315号、7頁	地中海学会	日本建築学会の学会誌「建築雑誌」において、海外経験とその日本での還元とテーマとした連載コーナーに寄稿させて頂いた。テーマは、モロッコ及びシリアで実施したフィールドワークでの成果の概要と、それをわが国において整理・再考した際に考えたことを固有性と多様性という対立項においてまとめたものである。
④-3-11「プロジェクト最前線:歴史的環境の保全・再生-東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所」	単著	SEEDer、第1号、2009年10月	昭和堂	総合地球環境学研究所が実施する、「地域環境情報ネットワークの構築と多角的研究」事業の関連学術雑誌「SEEDer」第1号において、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の活動内容の一端を紹介した記事である。人間・環境・情報の交錯としての歴史都市の保全・再生研究を、特に中東・北アフリカ地域を中心に概説する。
④-3-12「海外に学び、日本に学ぶ:フィールドで固有性に触れ、日本で普遍性を想う」	単著	建築雑誌、2009年10月、124号、29頁	日本建築学会	日本建築学会の学会誌「建築雑誌」において、海外経験とその日本での還元とテーマとした連載コーナーに寄稿させて頂いた。テーマは、モロッコ及びシリアで実施したフィールドワークでの成果の概要と、それをわが国において整理・再考した際に考えたことを固有性と多様性という対立項においてまとめたものである。
<b>④-4 作品または実践的な活動</b>				
④-4-1「中庭が支える低層高密度居住」	共同作品	都市建築の発展と制御に関する設計競技応募作品集、2005年3月	日本建築学会	これまで調査してきた、モロッコの中庭住宅地をモデルに、現代の都市設計に応用することを試みた建築コンペ作品。 担当:筆頭設計者 共同設計者:松原慎介
④-4-2「探検ロマン世界遺産 一千年の迷宮都市モロッコ・フェズ」	CG監修	世界遺産デジタル映像アーカイブス、2005年4月	NHKテレビジョン	これまで収集・作成してきたフェズ旧市街の図面及び地理情報を整理して、NHK番組の制作のために提供し、CG監修者として製作に携わった。
④-4-3「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力向上プロジェクト」	文化・歴史的建造物の保全	国際協力機構(JICA)技術プロジェクト、2009年-2012年	国際協力機構(JICA)	日本政府は、国際協力の一環として、シリアの首都ダマスカスの都市計画策定支援を永年行ってきた実績がある。今回、国際協力機構(JICA)が実施する技術プロジェクト「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力向上プロジェクト」においては、これまで研究者として歴史研究を実施してきた筆者自身が、プランナーとして実践的に参加する。施工まで実施するパイロット事業を歴史的地区において実施するもので、これまでの研究で得た知見を社会的に還元していく試みである。
<b>④-5 公開講演・セミナー等</b>				
④-5-1「CIAM モロッコの郊外地構想と独立後の変容」	単独	日本学術振興会「千年持続性・都市の持続性に関する学融合的な研究」講演会、2005年4月	東京大学生産技術研究所	主として業績②-7(当時投稿中)に基づきながら、カサブランカを中心に活動したCIAM(現代国際建築家会議)のメンバーの作品と、その独立後における変容の実態を、図版や写真といった講演ならではのメディアを駆使して伝えた。
④-5-2「番匠谷堯二 シリア都市計画に生きた日本人建築家」	単独	アレppo大学学術交流日本センター主催セミナー、2006年12月	アレppo大学建築学部	筆者がアレppo大学学術交流日本センターに博士研究員として在籍していた際、同大の建築学部で講演を行った。テーマはかつてアレppo大学で教鞭をとっていた日本人建築家・番匠谷堯二の生涯についてであった。
④-5-3「シリア都市計画の先人・番匠谷堯二」	単独	ダマスカス大学日本語学科主催セミナー、2007年2月	ダマスカス大学文学部日本語学科	国際交流基金の日本人日本語教師らの招待を頂き、上記アレppo大学での講演と同様のテーマで、しかし日本語を学ぶシリア人学生のために、より平易な日本語によってレクチャーを行った。

著書、学術論文等の名称	単著、共著等の別	発行(巻号頁)又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
④-5-4「ダマスカスとアレppoを守った日本人 番匠谷堯二」	単独	ナカーバ・モハンディスイーン(シリア技術者組合)講演、2007年8月	ナカーバ・モハンディスイーンアレppo支局	筆者の日本センター退職を記念して、シリア技術者組合のアレppo支局で講演を行った。ナカーバ・モハンディスイーン(シリア技術者組合)は、7、80年代にエコシャール・番匠谷計画を批判し、その反対運動の重要な拠点となったバース党管理下の組織である。30年後に改めてその歴史を振り返ってみるという、有意義な日本-シリア交流の機会であった。
④-5-5「北アフリカ・中東都市の保全と近代化 フェス・ダマスカス・アレppoを中心に」	単独	日本工営開発計画部定例セミナー、2008年10月	日本工営本社開発計画部	我が国の国際協力コンサルタント会社の定例セミナーにて講演し、実務と学術の交流を目指して活発な討論を行った。
④-5-6「モロッコの旧都フェズ-保全の営み」	単独	地中海学会主催連続講座「ワールド航空サービス 知求アカデミー」、2010年11月	株式会社ワールド航空サービス本社会議室	筆者の博士論文のテーマであった、モロッコの旧都フェズを対象に、その歴史と生活文化、および現代に至るまでの都市保全の経緯を一般向けに解説した。これまで筆者が関連したプロジェクトや、TV番組DVDなどのメディアを適宜導入することで、多くの方に臨場感をもって都市の魅力を伝えるよう工夫した。
④-5-7「都市保全計画と世界遺産」	単独	アレppo大学学術交流日本センター、筑波大学世界遺産学専攻共催セミナー、2010年12月	アレppo大学建築学部	筑波大学世界遺産学専攻の日高健一郎教授を中心に、国際協力基金の助成に基づく世界遺産学の連続レクチャーを、カウンターパート候補であるアレppo大学建築学部において実施した。筆者の発表は、ポストドク時代に実施したアレppo研究に改訂を加えたもので、より趣旨をはっきり伝えることができた。日本センター副所長のマンスール准教授による日本語-アラビア語逐語訳。
<b>④-6 受賞</b>				
④-6-1「日本都市計画学会論文奨励賞」	単独	2006年5月	日本都市計画学会	博士学位論文『近代都市計画の導入に伴う都市空間の形成と変容から見た歴史都市フェスの都市保全』(業績①-1)に対して、これまで論文を発表してきた都市計画学会より奨励賞を授与された。
④-6-2「日本都市計画学会 2008 年年間優秀論文賞」	単独	2009年5月	日本都市計画学会	業績②-9「番匠谷堯二の中東・北アフリカ地域における業績について」に対して、研究の新規性、および国際性が評価され年間優秀論文賞を授与された。
<b>④-7 競争的研究費の獲得と実践</b>				
④-7-1「モロッコ・フェス旧市街の保全再生手法に関する研究」	共同	住宅総合研究財団 No.307、2003-4	住宅総合研究財団	筆者が博士課程在籍中に申請、採択された、若手向けの研究助成である。筆者のほか、イスラム建築、都市史の専門家や青年海外協力隊員出身者の協力を得て実施し、計画通りに完遂された(業績②-6)。
④-7-2「現代イスラム都市の多元的成り立ちに関する研究」	単独	科学研究費補助金(特別研究員奨励費)、2004-2006	日本学術振興会	筆者が博士課程在学中及び博士号取得後において申請、採択された、日本学術振興会特別研究員専用の科学研究費補助金である。複数の海外調査及び国内学会発表、縁級資料購入費として活用した。
④-7-3「歴史都市フェスの保全と近代化」	単独	科学研究費補助金(研究成果公開促進費)、2007	日本学術振興会	筆者博士論文(業績①-1)を基に、一般書店から販売、成果公開をすることを狙った出版助成である。助成計画の通り実施、出版された(業績③-1)
④-7-4「中東三都市の保全・継承において日本が果たした役割に関する研究」	単独	松下国際財団研究助成、2009-10	松下国際財団	筆者のポストドク研究のとりまとめのために申請、採択された、若手研究者向けの研究助成である。一度の海外調査及び数度の国内学会発表、研究資料購入費等として活用した。
④-7-5「国際交流を背景とした中東都市計画史研究と都市保全プロジェクトへの還元」	単独	科学研究費補助金(若手B)、2010-11	日本学術振興会	筆者によりポストドク研究以後の研究テーマである国際交流を視点として申請、採択された科学研究費補助金である。2010年現在実施中である。



